

脳梗塞引き起こした血栓

長嶋襲った心房細動の恐怖

一瞬にして健康を奪う恐怖——病気とはまったく縁がなかった長嶋茂雄氏(68)が倒れたのは、心房細動による血栓が脳につまったのが原因だった。



「僕は今まで入院したことないんですよ」と語っていた長嶋氏。早朝のジョギングなど健康には気を使っていた／3月2日

編集部 瀬川茂子、大和久将志、内山洋紀、福井洋平

3月4日午前11時ごろ、東京・田園調布にある長嶋氏の自宅で迎えの運転手が異変に気づいた。2時間待っても出てこなかったのだ。連絡を受けて病院に先回りしていた長嶋の一茂氏は、その時の様子を、

「病院に運び込まれたときは意識ももろろうとし、ストレッチャーに乗せるのが一苦勞でした」と話す。

緊急入院した東京女子医大で、脳梗塞の一種である「心房性脳塞栓症」と診断された。

心臓の左心房にできた血の塊(血栓)がブリンのように固くなり、何かの拍子で心臓から動脈に流れ出した結果、脳に行き着いて詰まった。

血栓の原因となったのが「心房細動」である。心房が細かく動くとはいったいどういうことか。心臓外科手術に定評のある大和成和病院(神奈川県大和市)の南淵明宏医師はこう説明する。

もちつきを想像してほしい。1回こねて、1回つく。心臓の動きにたとえると、「こねる」のが心房

「つく」のが心室。心房が収縮してポンと合図を出すと、心室がギュッと収縮する。

心房細動とは、それが1秒に何回も「こね」たと思えばいい。心室はその動きについていけず、脈が不規則になり不整脈が起こる。

たいていは一過性で元に戻るが、そこに脱水症状が重なったり、ストレスで血がネバネバになっていたりすると、心房内にとどんでいた血液が固まって血栓になる。

30代から起こるリスク

南淵医師は警告する。

「心房細動は知らないうちに頻繁に起きている。30代から50代の働き盛りでも突然なることがあると知ってほしい」

酒を飲んだときは要注意だ。気持ちが悪くて吐いたり、頭がクラクラして横になりたいと思ったら、心房細動の可能性がある。脈がめちやくちやになるので自分でわかるという。

そんなときは、まず気持ちを落ち着け、冷たい水を飲むこと。心臓の裏にある食道が冷えると、心